

Newsletter Citizen's eyes vol.39

2024年7月7日発行／ジャーナリズムを考える市民連絡会とやま

連絡先 ☎ 090-4680-6336 <https://civic-journalism.wixsite.com/mysite>

報道機関への強制捜査と「取材源秘匿」原則の侵害

情報源の秘匿は報道・取材の自由を確保するために重要な原則だ。ところが鹿児島県警が報道機関に強制捜査をし、取材情報が入ったパソコンの押収をもとに警察内部の情報を外部にもらした者を特定し、同警察の不正を内部告発しようとした同県警の元警察官を国家公務員法違反で逮捕するという問題が生じた。取材源の秘匿を侵害し内部告発・公益通報を抑圧した事件だ。また「報道の自由度ランキング」を落とす事件が起きた。(お) ※今年の日本の「報道の自由度ランキング」は70位。

5月30日KNB ラジオ報道スペシャル ～ふるさとの亀裂 地震と過疎と原発と～

大島俊夫

今年の元日、13年前に起きた東日本大地震に匹敵する大きな揺れ（最大加速度2826ガル）を観測したマグニチュード7.6の能登半島地震によって奥能登地域を中心に200人を超える犠牲者や8万棟を超える建物損壊など大きな被害をもたらされた。

一方で、震源とされた地点は珠洲原発の立地付近であったため、改めて地震における原発の危険性を多くの人々に気づかせた。

地震によりもたらされた能登半島のおびただしい道路が損壊し寸断、広範囲の数メートルの海岸隆起、多数の建物損壊が、地震による原発事故時の避難計画の破綻を白日の下に曝した。

原子力発電所運転期間の60年超への延長を可能とするGX（グリーントランスフォーメーション）脱炭素電源法の成立など再び原発回帰に向かい始めた日本。今回の能登半島地震を受けて、地震列島日本における、報道機関に求められているのは「地震と原発を考える」調査報道でありドキュメンタリー番組でないか。

5月30日夜にKNBラジオで1時間の報道番組があると知り、グループ内に案内メールを送り、志賀原発株主訴訟原告の和田さんには当番組の感想文をお願いした（次ページ掲載）。

当番組を取材構成しナレーターを務めた数家直樹さんに連絡、後日、当番組についてのお話を聞く機会を得た。その概要を含めて番組を簡単に振り返りたい。

（番組の主な内容）

元日の能登半島地震の震源地でもあり、多くの被害を被った珠洲市。そこは珠洲原発立地を巡り30年近い粘り強い反対運動が展開され、立地計画を実質的な断

念に追い込んだ地域である。それは同時に原発反対と推進をめぐっての住民間の対立もあった地域だ。今回の特集番組は、能登半島地震の被災者となった当地域の人々が建設されたかもしれない原発や過疎が進む珠洲について、どんなことを思い、考えているのか。インタビューと現地レポートによって、原発立地計画と地震に揺れた珠洲の過去と現在を伝えた番組である。

（企画から放送まで）

ラジオドキュメンタリーになったのは、能登地域が従来よりKNBのラジオ放送が県内と同じように電波が届く放送エリアとして考え、聴取者を獲得していたことによる。2月初めに企画が持ち上がり、3月に取材準備、4月に現地取材、5月に編集、5月末放送となった。

（心掛けたこと）

ラジオドキュメンタリーは、インタビューとナレーションによって構成されるのが特徴だ。

映像がない分、取材者のレポートでは聴取者がイメージしやすいように具体的な高さや大きさに触れ、色の説明を重視していること、また取材時の車のエンジン音、走行音など現場の空気感が伝わるように心がけた。

環境音の中で「ポイント」として構成したのが「鳥の鳴き声」。推進派の住民にインタビューしている時にたまたま聞こえてきた鳶のさえずり。高屋地域で原発反対であった雑貨店の軒先にこの春に再び巣作りに戻ってきたあわただしく飛び交う燕たちのさえずり。いずれも自然豊かなこの地域の特徴を印象深く伝えていた。

（原発推進を掲げた人々の変化）

地震被災を受けて、原発、推進反対双方にインタビューしているが、原発推進を掲げた人たちの考えの

（注）今回のラジオ番組は29日から31日までの3夜連続の特集番組の一つとして放送され、2024年日本民間放送連盟賞に応募された番組でもある。5月29日に「ポケットからタンパリン～それでもビートを刻みたい」、5月31日に「This is NORI オペラ歌手澤武紀行」1が放送された。

変化についてふれたインタビューに注目した。

原発を推進した人たちの大きな転機になったのが「2011年の福島原発震災です。あの事故を見て原発なくてよかったと推進を語ってきた人が何人もいたが…「それでもやっぱり珠洲に原発があればこндаけ過疎が進むことがなかったのにね」と言っている人もいた。「そういう人たちも今回の地震でやっぱり無理やったなど、なくてよかったと。地震の後でそれでも珠洲に原発という方はさすがにおられなくなったんじゃないかと思う」と原発反対の北野進さんが話す。

実際に推進派だった自民党市議の森井洋光さんが原発に対する考えが変わったと答えているのは興味深い。「推進というのは過疎からの脱却ということであの当時大切だと思って」いた。「今の珠洲の状況を見たらなくてよかった。」

(原発でなくもう一つの道を問いつける人びとの声)

原発反対の声を上げていた人たちからは一様に原発の誘致などの巨大地域開発とは違った道を模索している心情が述べられていた。

過疎の進行を否定せず、それでも、「国や企業の大き

な金を使ってそれで何とかしようとそんな発想はおわりだわ」と述べる珠洲の乗光寺の坊守の落合誓子さん。

「消滅しそうですね。だけど誰かが守るんですよ。最後に残った人が、自然の中で共生しながら豊かに暮らせるのでないかな」と元高校教員の秦廣文さんは話す。

「原発反対運動というのはただ単にコンクリートの原発施設ができるから反対としてきたのではなく、今まであったこの地域の豊かな自然なり歴史や文化を守っていききたいという思いが根底にあり、さらに次につなげていききたいという思いで反対してきた。それは今回の地震があってもその思いをつないでいく。その積み重ねの中でこれからの珠洲の姿が見えてくるのでないか」と北野進さんはインタビューに答えている。

最後に

能登半島地震によって様々な原発の問題や危険性が浮かび上がった。志賀原発を抱える北陸電力がある富山の放送局として、継続的な原発に関する特集番組の制作、とりわけテレビドキュメンタリーの放送を多くの市民が要望していることを確認しておきたい。

珠洲を描いた素晴らしいラジオ番組

和田廣治

1989年4月に行われた珠洲市長選挙で、原発推進の現職が当選したものの、原発反対を訴えた2人の候補者の合計票数が推進派を上回りました。しかし関西電力が5月から珠洲市高屋地区で原発の立地可能性調査開始を強行。それに対して市民の皆さんが連日現場に駆け付け、社員らを説得しました。

KNBラジオの番組で流れてきた市民の皆さんの必死の訴えの声を聞くと、高屋地区の現場や、社員らの宿泊場所だった木ノ浦国民宿舎の駐車場で連日説得活動を続けたこと。また市役所で市長が開催した市民説明会の会場から市長自身が逃げ出し、その会議室で市民が40日間にわたり市長を待ち続けたこと。さらに6月30日に知事らが高屋地区公民館に来た住民説明会も決裂し、多数の市民が抗議の声を上げたこと。私も目撃したその様々な場面が鮮やかに浮かんできました。

私が接した珠洲の皆さんは、「阻止行動」「市役所占拠」という強い表現の似合わない優しい人たちばかりでした。能登の自然を愛し、珠洲を愛し、人を愛するからこそ原発に反対していました。毎週駆けつける私に「仕事は首にならないか」と心配したり、漁協のおばちゃんたちがおにぎりを配ってくれました。

2003年12月に電力側が計画断念するまで、珠洲の皆さんが数々の妨害にもめげず選挙などでも原発反対の声を上げ続け、原発を止めてくれたおかげで、今回の地震で私たちは助けられたことを、この番組は見事に描きました。



《コラム》 沖縄のいま (30)

県議選与党大敗 けれども平和への思いは揺るがない

小原 悦子

6月16日、沖縄県議会選挙において、玉城デニー知事を支持する県政与党が大敗した。自民(20)・公明(4)・維新(2)・野党系無所属(2)の当選者は合わせて28人。一方、与党側は共産(4)・社大(3)・立民(2)・社民(2)・与党系無所属(9)で20人。投票率は過去最低の45.26%だった。ただ、辺野古に関しては、公明党が中央とは異なり辺野古新基地に反対の立場を堅持している。琉球新報はサブタイトルで、辺野古賛否同数と明記した。

全国では自民党の裏金問題で揺れている。ところが沖縄では、裏金問題は論点にならなかった。選挙結果を受けて、与党の敗因が論議される。候補者を絞り込めず共倒れとなった、経済人や保守政治家が「オール沖縄」から離れた結果だ、2年後の知事選へ向けてこのままの「オール沖縄」体制では勝ち目は無い、云々。しかし、与党側の無所属候補が9人も当選したことは快挙だ。沖縄の市民運動は元気だという証拠ではないだろうか。

辺野古新基地は国の強権発動の代執行によって大浦湾側の埋め立て工事が着工される。沖縄の声を無視する国に対して、あきらめるわけではないが、徒労感が漂っているのも確かだろう。だとすれば、それはむしろ本土側の問題だともいえる。いつまで沖縄を孤立させるのか。

嬉しい結果も出ている。女性議員の数が7人から8人に増えた。しかも、4人が新人議員だ。全体の立候補者75人のうち女性は12人だった。そのうちの8人が当選したのだ。定数48議席の半数にはまだまだ届かないが、活躍を期待したい当選者ばかりだ。儀保唯さん(無所属)、幸喜愛(かなし)さん(社民)、平良敷子さん(社大)、松下美智子さん(公明)。

特に儀保唯さんには注目している。保守性の強い国頭郡区から立候補した。現在も、男性ばかりの戸主会という組織が地域で重要な地位を占めているという。そのような中でヤンバル初の女性県議が誕生した。儀保さんは弁護士として辺野古住民訴訟に関わっている。弁護士の仕事では解決できない貧困問題があると気づき、「格差や不平等を作り出している日本の制度そのものを変えたい」と訴えていた。2歳児の母でもあり、立候補後に妊娠が分かった。女性議員が妊娠・出産・子育て期であっても、活躍できる社会になるようにと妊娠を明らかにして選挙戦に臨んだ。「違う立場の人たちともしっかりと話をしていきたい」と抱負を述べている。他の新人女性議員ともども、県議会にさわやかな風を吹き込むことを期待したい。

旧軍の遺伝子を受け継ぐ自衛隊でいいのか

以前から「慰霊の日」の早朝に、那覇の陸自第15旅団の複数の幹部が制服姿で黎明の塔に参拝することが問題視されていた。黎明の塔は第32軍(沖縄守備軍)の牛島満司令官や長勇参謀長を祀っている。ここ3年間は参拝を見合わせた形だが、昨年も今年も県外の市民が旭日旗や日の丸、米国旗などを立てて参拝している。今年は「海行かば」を歌うグループもいたという。平和の礎の周辺とは明らかに異なる異様な雰囲気醸成している。

折りしも第15旅団ホームページの沿革において、「初代 桑江群長沖縄県本土復帰に伴う訓示」の中に第32軍牛島司令官の辞世の句が引用されている。6



月 24 日現在、削除されていない。

沖縄の人々は陸上自衛隊は旧日本軍とは別の組織であるはずだ、それとも、旧軍の遺伝子を受け継いでいるのか、と抗議の声を上げている。沖縄戦において、「アメリカより友軍が怖かった」「日本軍に泣く子の口を塞げと言われた（泣く子を取り上げて殺された）」「自決を迫られた」などの証言は今も人々の記憶に深く残っている。日本軍に対する複雑な気持ちがある。そのような県民の心理を無視するかのように、旧軍司令官の辞世の句の掲示だ。県民は抗議し、多数の市民グループが辞世の句を HP 上から削除するよう求めている。

6 月 20 日、新基地を考える辺野古有志の会とティダの会も那覇の 15 旅団へ出向き、辞世の句の削除を

要請した。要請文とその際の録画を目取真俊さんが自身のブログで紹介しているのだが、95 歳の島袋文子さんや名護市議の 84 歳の大城敬人（よしたみ）さんが、駐屯地前の路上で要請している。梅雨が明けた夏の日差しの下で、パイプ椅子が用意されたとはいえ、もっと心配りのある対応ができないものか。文子さんが沖縄戦当時の体験を話すのだが、対応した自衛隊員はどう思って聞いていたのだろうか。やはり、旧軍の遺伝子が受け継がれているとしか思えない。

陸上自衛隊第 1 5 旅団に対するティダの会と新基地問題を考える辺野古有志の会の要請 - 海鳴りの島から (goo.ne.jp) (←目取真さんのブログ)

「北朝鮮帰国事業」

甲田克志

巨大な拉致と呼ばれる北朝鮮帰国事業だが、半知半解ながら取り上げてみたい。県立図書館の新刊棚に「北朝鮮帰国事業と国際共産主義運動—資料が明らかにする真実—」（現代人文社）を見かけた。その分厚さと定価 7 0 0 0 円に、今借り出さないと生涯手にすることはないと即断した。著者は 6 3 年生まれの川島高峰・明治大学准教授で、論文や新書などで書き散らしては真実に迫れないと、ほぼ 2 0 年掛けて書き下ろした大著。

その帰国事業だが、1 9 5 9 年末から 8 4 年夏までにはほぼ新潟港から、9 万 3 3 4 0 人の在日コリアン（日本人妻 6 8 3 9 人含む）が北朝鮮に渡った。5 0 年代、差別と貧困にあえぐ在日コリアンにとって北朝鮮は「地上の楽園」と謳われ、教育は保障され、医療福祉も無料と聞けば誰しも憧れる。情報源は総連系の口コミであり、グラビア雑誌「朝鮮画報」などが後押しした。現実とは程遠い情報がまことしやかに流布されていった。また、南北の国力も、むしろ北の方が勝っていたのかもしれない。そこに朝鮮戦争が巻き起こる。戦争終結は荒廃した領土の復興もあり、共産圏からの猛烈な虚実ない交ぜの平和攻勢となり、帰国事業を後押しした。

高校同期の在日の友人がいる。ある時「俺もまかり間違っていれば、北に行っていたかもしれない」と口走った。国立大学の工学部を出たが、民族問題に目覚め、総連の活動に携わっていた。新潟で帰国事業のサポートをしていた時期もある。「今思うと、ぞっとする」という。

北朝鮮では最初から革命の理想など皆無で、自らの金王朝の維持だけに狂奔した。粛清に次ぐ粛清を際限なく繰り返し、出身成分なる身分制度は 3 階層（核心層・動揺層・敵対層）5 1 区分と厳しく定められている。「日本帰還民」は 3 2 番目に分類された監視対象。社会的に上昇することはあり得ず、むしろ政治犯に仕立てあげられる危険性がつきまとう。全員に公民証が発行され、年 2 回の審査があつて、すさまじい監視体制化で生きることになる。このような事実が明らかにされないのは、いわば帰国者が人質になっていることに由来する。

地獄に追い落とすような北朝鮮帰国事業とは、何だったのか。戦後まもなくは韓半島からの日本人引き揚げ者と、韓半島から強制動員された朝鮮人の帰還者がピストン輸送の観を呈し、対馬海峡を往復していた。そこに朝鮮戦争が勃発し、米ソ冷戦の代理戦争となり、左翼思想を持つ在日は日韓でも排除したいとなり、北への送還が渡りに船となったのではないのか。

一方で、徴兵制の韓国へは何としても避けたいと、日本への密入国が盛んに行われていたことも忘れてはならない。大村収容所事件は、韓国に受け入れを拒否された人がそれならば解放せよと決起した事件である。

在日の同期生に申し訳ないと心から思う。今回の入管法永住権剥奪法案は、何かあれば日本に住み続けられない。片時も忘れることはできない。のほほんと暮らすぶんくら老人にはとても想像が及ばない不安である。彼から祖国をむしり取ってきた、今に続く植民地支配の罪深さを思う。

イスラエルにしがみつくとシオニストがホロコーストも辞さない祖国とは何か。同様に、わが祖国日本というのも薄っぼいし、嘘っぼい。「私の祖国は世界です」（玄順恵）といい切りたい。